

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 102 Aug.

都留文科大学 地域交流研究センター 機関誌
『フィールド・ノート』 no. 102 Aug. 2019



特集

つくる人、

うけとる人

思い出を語る場所

新しいカフェのかたち

思いは巡る。



ー『フィールド・ノート』とはー

『フィールド・ノート』は「都留を観察し、記録し、学び合う」をテーマに2002年に創刊されました。本学の学生がみずから地域に出て自然や人びとの暮らしなどを取材し、編集・発行しています。



表紙写真

昼間、ブuddleアの蜜を吸いにきたオオスカシバです。はばたきながら空中にとまるようにして蜜を吸う姿はハチドリのようなです
(2019年7月19日)

FIELD·NOTE

no.102 Aug.

CONTENTS

特集 / つくる人、うけとる人

06 思い出を語る場所

10 新しいカフェのかたち

14 思いは巡る。

22 フィールド暦

24 つながりが生まれる

27 富士急行線駅展示 企画展のおしらせ
かけた時間が思いをつくる

28 つるまちアートギャラリー

30 人として大切なこと

32 縁を繋ぐひと ～前編～

35 今号の撮っておき

36 目の前の景色に隠れた歴史
変わりゆく大桑山の“いま”をつなぐ

38 センサーカメラが写した動物たち

40 ^{おりみず}Cafe 織水
一悩んだとき、活力が欲しいとき、思わず行きたくなる店ー

41 ただいまを言いたくなる店

42 楽しみをつくる
星空と、都留の人がつくる小夜景

43 つるの子公園
ここは私の第二の故郷

44 都留の風景写真集ー盛夏の候ー



うら山にいたカマキリです。夏らしい、動きのある写真が撮れました(2019年7月24日)



つくる人、
うけとる人

私たちが都留にあるお店を訪れたとき、
料理やものを「つくる人」の
作業に打ち込む凜とした姿勢、
お客さんを思う優しい表情が見えました。



何かを「つくる人」のまわりには、
丹精込めてつくられたものを「うけとる人」
がいます。

私たちは何度もお店に通う
「うけとる人」にお話を聞くことにしました。
そうすることで、私たちの知り得ない
新しい「つくる人」のすがたを見ることが
できるのではないかと考えたからです。

この特集では、
「つくる人」と「うけとる人」が
集まる空間におじゃまします。

思い出を語る場所



お客さんの注文を受けるゆかりさん(2019年7月27日)

佐藤ゆかりさん(56)が営む「アルバム」は桂町にひっそりとたたずむ喫茶店だ。^{かつらまち}一番最初にここを訪れたとき、自分が幼少期に戻って秘密基地を見つけたような感じがして心がはずんだ。そう思うのはなぜなのか。知りたくなった私はここに通ってみることにした。

風間悠花(地域社会学科2年)=文・写真



店主の魔法にかけられる

「アルバム」はパスタやオムライス、ハンバーグといった主食のほか、ケーキやクッキーなどのデザートを提供するお店だ。お店に入ると、私は店主であるゆかりさんの愛くるしい笑顔に一瞬にして魅かれた。この笑顔を何人ものお客さんが目にしているとすると、なぜか独り占めしたくなる。そう思ってしまうほどにゆかりさんの笑ったときの表情は素敵だ。そんなゆかりさんが作るお料理は、素朴で優しさを感じる。一度食べたなら忘れられない味だ。



オムライスチーズ焼き。オムライスとホワイトソースの相性がよかった。(2019年7月9日)

ゆかりさんがお店を構えたのは21歳のとき。今年で35年目になる。「あつというまですよ。あなたも日々大切に生きてください」。その言葉に35年間お客さんが集まってきたお店の歴史を感じた。

壁に貼られているカレンダーに休店のマークが記入してあった。ぼーっと眺めていた私だったが月に1、2個しか印がついていないことに気がつき驚いていると、「遊んでるようなもんだから」と手で口元を隠しながら言い、「大変なときがうれしいときかもしれない」と思い立つたように言葉を添えた。一人でお店を営むゆかりさんが弱音を吐くことはなく、いつも前向きだ。

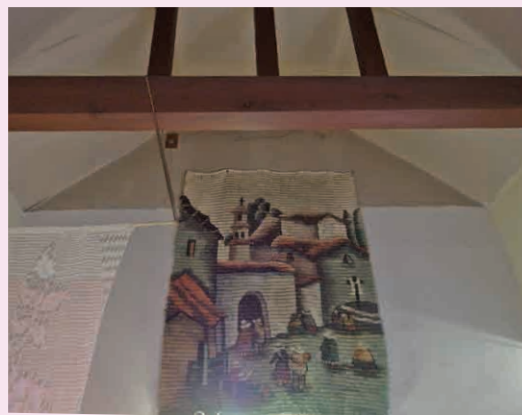
お店は外装から内装まですべてゆかりさんがデザインした。「天井があると狭く見えちゃうってことでこんなふうに天井を取り払っちゃったの」。話を聞きながら上を見ると、吹き抜けになっただけで空間に余裕を感じた。そこに差し込むライトの光が一層広さを感じさせる。この天井の余裕がお客さんを包み込むようなゆかりさんの雰囲気と重なって見えた。



よみがえる思い出

客層は子どもからおじいちゃんおばあちゃんまで幅広い。店内には子どもたちがつくった折り紙や絵が飾ってある。壁には県立谷村工業高校（現都留興譲館高校）の生徒が作ったポスターも貼ってあった。

私が「アルバム」にお邪魔したのはお昼を過ぎてからだだったが、お客さんの姿があった。女性3人のグループだ。そのなかの一人にお話をうかがうことができた。そのかたは20年ほど前から「アルバム」に通うお客さんで、



吹き抜けの空間に店内の優しいライトの光が差し込む。(2019年7月27日)



- ① 4人がけの椅子席はお店に全部で四つある。
 ② ゆかりさんがつくる、キャラクターのお菓子
 ③ ゆかりさんが立つ厨房
 ④ お客さんから大人気のチーズケーキ

(2019年7月27日)



週に何度か足を運ぶそうだと。「ここはね、家事の合間にリフレッシュできる場所です。ここにはオープンなお客さんが多く来るから、すぐお友だちになっちゃうんですよ。あ、ゆかりさん。私、リゾットのパン抜きですけど大盛で」。お店に元気のいい常連さんの声が響く。ゆかりさんは「わかりました」と言い、目尻を下げると厨房に向かう。料理をつくりながらもカウンターの席に座った私の相手をしてくれる。「アルバム」では、席にポツンと座り、何もしゃべらずに帰るお客さんをこれまで見たことがない。

学生時代、好きな人や友だちと話す場の一つであつた「アルバム」に、大人になつて結婚してから子どもを連れて遊びに来るかたもいるのだそう。味が変わつてない。当時の懐かしい雰囲気がいまも残る。アルバムならでは、というところが多くの人に「また行きたい」と思わせる理由なのかもしれない。

そのとき、店内に歌手の松任谷由実さんの「やさしさに包まれたなら」が流れた。選曲したのはもちろんゆかりさんだ。平成生まれの私にとって、この雰囲気はすごく新鮮に思えた。



お客さんが語る「アルバム」

ゆかりさんがお店を「アルバム」と名づけた理由を聞いた。すると「あいいうえお順に並ぶ電話帳で調べるときに『あ行』のほうが見つけやすいでしょ？ だからなの」と答えがかえつてきた。その斬新な考えに戸惑う私を見て、私の隣に座つていた男性のお客さんが言葉を加えた。「35年経てばここでの人の出会いが膨大な思い出に繋がるんだろうな。僕は去年から来ています。ファンになっちゃつた」とカウンター越しのゆかりさんを前に、恥ずかしそうに口にした。そういえば、ゆかりさんはさつきからお店について得意げに語ることはせず「そんなことないですよ」と首を横に振るばかりだ。その代わりにお客さんの口からは、お店の心温まる話が溢れんばかりに出てくる。



特製デザート

ゆかりさんは「私事です」と言う私のためにケーキをサービスしてくれた。「これはね、朝の連続テレビ小説の『まれ』にでてきた『ジュテームモワノンプリュ』っていう

ケーキなの。意味は『愛してる、僕も愛してない』なんだって」。私はその意味がよく理解できなかったが、ゆかりさんと男性のあいだに挟まれながら大人の恋話に加わったようで嬉しくなった。

『クローフ』ってわかる？ 紅茶のシフォンみたいに真ん中に穴が開いてるやつ。あれは王冠って意味なの」。ゆかりさんがたびたび口にする難しいお菓子の用語を後を追うように男性と私で真似てみるが、舌がうまく回らず2度も3度も言い直した。



お客さんをつくりあげる

数日後、再びお店を訪れると三角屋根の平屋の建物は小窓が外側に開いていた。小窓が開いているということはお店がオープンしている証拠だ。「強い風が吹くとね、自動ドアのように閉まるんです。風の仕業よ」とゆかりさん。お店に向かう前、ゆかりさんに電話を掛けていた私に「さつきはすぐに切っちゃってごめんなさいね。今日はオープンから満席だったの。あなたの電話が私に幸運をよんだのかも」と言う。そんなことをさらつと口にするゆかりさんの人柄に私はまた魅か

れてしまう。

「今日はね、パンを焼いたから持って帰ってね」と言うとおからブタのかたちをした可愛らしいパンを持ってきてくれた。「笑っているほうが小豆です」。ゆかりさんにそう言われてブタをよく見ると一つひとつ表情が違った。先ほどの常連さんが「ゆかりさんの作るものは進化する」と言っていたことを思い出した。ブタのパン以外にも店内には流行のキャラクターを描いたお菓子たちが並ぶ。そのバラエティの豊かさに驚く。ゆかりさんは「お客さんがあればできないか、これはできないか、と提案してくれんです。そうするとなんか燃えちゃうの」と言う。



焼きあがると、香ばしい香りがお店中に漂う。なかには小豆かクリームが入っている(2019年7月27日)

この喫茶店を訪れるお客さんはまるで自分のアルバムを開くようにお店での思い出や自身の過去を振り返っていた。それは長年「アルバム」に通う人だけでなく、つい最近お店の存在を知りファンになった人も同じだ。ゆかりさんはお客さんの話を静かに微笑みながら聞いている。私もいつか学生生活の思い出を語りにこの笑顔に会いに行きたい。





新しい カフェのかたち



イベントの打ち合わせをするようす(2019年7月9日)

「新しいカフェを見つけた」という友人と訪れた「まんまるカフェ」。
やむらまち
谷村町駅を出て国道139号線に向かって徒歩2分ほどのところにある。長居してしまうような落ち着いた空間と、素材が生かされた優しい味のパンに魅了された。このカフェに集う人にお話を聞くと、カフェが目指すものが見えてきた。

地域の交流拠点として

「まんまるカフェ」は、就労支援福祉施設「いちごいちえ」と併設して今年5月6日にオープンした。「いちごいちえ」と「まんまるカフェ」の現場責任者である山岸優香梨さん(48)は、福祉施設とカフェを一緒にした目的は二つあるとおっしゃる。一つ目は、施設にいる約30人の利用者さんの仕事をつくりだしたということ。今までは室内でコツコツと仕事することが多かったが、社会に出て貢献したいというかたが増えてきた。「だったら、私たちが利用者さんが働ける場所をつくらう」と思ったそう。そしてカフェをつくることになった。今は環境を整えるための土台づくりとして、カフェの従業員のかたちだけで働いている。「次の段階で、そろそろ施設の利用者さんも一緒に働ければ、地域の人も働いていて、障がいのある人も働いているっていい。ここは福祉事業所だけれども、みんなが楽しく働いている場所にしたい」と山岸さんはおっしゃる。

二つ目は、ここを地域の交流拠点にしたいという想いがあること。障がいがあるかた

けでなく、地域のかたや学生も含めてみんなが集える場所を考えていた。そのため、2階には小さなお子さんがいても安心してくつろげるようなスペースを設けている。「お子さん連れてなかなか出かけられないじやないですか。だから気がねなく長居してもらえれば」という。後日訪れたとき、お子さんを連れのお母さんたちが2階に案内されていた。かなりくつろいでいるのか、2階から子どもたちの元気な声が聞こえてきて癒された。

さらに、毎月第3日曜日には、「まんまるマルシェ」というイベントをおこなっている。

山岸さんは『いちごいちえ』も出展者として参加しているんですよ。雑貨をつくっている人やお弁当をつくっている人とか、そういうかたが出店しています」とおっしゃる。秋には、木管四重奏のミニコンサートも予定しているそう。地域の交流拠点を目指して、誰もがふらつと立ち寄ることができるような仕掛けがいっぱいだ。「たくさんのかたにきていただいて、ここにくると色々な情報が聞けるよとかそんなような基地的な場所であるといいなって。ここから情報が発信できる場所であれたらいいなと思います」と力強く話



左：レジで会話をしている山岸さん(左)と亀田さん(右)(2019年7月8日) 右：障がいがありながら絵を描く小林浩太朗さんの作品(2019年7月8日)



左：焼きたてのパン。香ばしいかおりがあたりに広がる（2019年7月9日） 右：手ぎわよくパンづくりをする亀田さん。作業台には、材料がたくさん並べてある（2019年7月9日）

てくれた。さまざまな人が集えるような心配りが、暖かく落ち着いた空間をつくっているのだろう。

これからがはじまり

「まんまるカフェ」のメインはパンだ。カフェのパンづくりを担当する亀田めぐみさん（45）は、「このパンは天然酵母を使っている、（酵母は）生きていますので、やっぱり時間とか、温度とか、そういうものは気をつけながら」と、パンづくりの大変さを教えてくださった。今年に入ってからパンづくりをはじめて、まだまだ勉強中だという。「今まで天然酵母というパンの美味しさに気がつかなかったんですけど、このパンはその美味しさがわかりやすく表現されていると思うのでみなさんにも味わってもらえたらなあと思っています」と微笑みながらおっしゃった。オープンして間もないが、「美味しいといわれることが一番嬉しい。お持ち帰りをしたいとかね。施設の利用者さんとかが加わってメンバーも増えれば、パンの種類も増えるんだけどね。パンだけ買っていきたくないあな人という人にも対応できるようにしていきたい

いですね」と話す亀田さんからは、やりがいを感じながら前向きに働いていることがうかがえる。

山岸さんは、「今、カフェのスタッフたちが感じているやりがいを、施設の利用者さんにも感じてもらいたい」とおっしゃる。障がいがあるないに関係なく誰もが生きいきと働ける場所は、地域の活力となるだろう。「まんまるカフェ」もパンづくりもはじまったばかりだ。これから先も試行錯誤を続けていく。

「まんまるカフェ」に訪れたら

奥さんが週に1回「まんまるカフェ」で働いているという三枝秀雄さん（81）は、「今まで都留に、こんなに明るくて開放的なカフェはなかったんだよね。谷村町の中心になりますね」と嬉しそうだ。カフェのスタッフである賀川一枝さん（58）は、ふふふと笑いながら「三枝さんは『まんまるカフェ』の応援団なんですよ」と教えてくれた。「三枝さんは転勤が多くて、あっちこっち行ってたからよそのこともよくご存知だし、記憶力がものすごく。どこになががあるかとかすごくよく覚えてらっしゃるんです。80歳越え



入り口から一番奥のようす。暖かい色の照明が照らす(2019年7月8日)



メニューのなかに、自分でパンに焼き目をつけられるものがある(2019年7月8日)



窓から光が差し込む。作品の販売もしている(2019年7月8日)

てるとは思えないでしょ」と賀川さんがおっしゃると、三枝さんは「いやあ、もうだめだよ」と笑っていた。お二人は昔からの知り合いだそうで、ずっと楽しそうに会話をしていた。賀川さんは、「カフェで働く従業員も、知り合いのかたに頼んだりして。地域の人がたくさん働いてくれると、そのお友だちとかで地域の人もたくさんきてくれますよね。当時一緒に働いていたかたが今育休中なので、よく2階を利用してくれます」とおっしゃる。人と人のつながりがあって、わざわざ訪れてく

れる人もたくさんいるそうだ。だから、「まんまるカフェ」に訪れたらアットホームな雰囲気を感じる。

〇〇〇

お話を聞きながら、「まんまるカフェ」は

人と人を結ぶ場所だと思った。山岸さんは「施設の利用者さんや、生きづらさを抱えている人がここにきてホッとできる場所や、活躍できる場所であり続けたいなっていうのはずっと考えていました」とおっしゃる。はじめて

友だちと訪れたとき、食べ終わってからもうつろいで長居してしまった。私がここでゆっくり時間を過ごせたように、これから地域の交流拠点として変化を続けていくなかで、たくさんの人に思い思いの時間を過ごしてほしい。

山岸さんたちがつくる新しいカフェのかたち。それが誰かの背中を押すはずだ。

宇佐美温加(社会学科3年) 文・写真

思いは巡る。

天野さんがふだん作業をするパソコン。色のパターンをこのパソコン上でつくり、みずから提案することもあるそうだ

「天野商店」を知ったのはインターネットで都留の織物^{みつとうげ}について調べているときだ。富士急行線の三つ峠駅から少し離れた都留市の境という場所で、おもに傘生地を取り扱っているという。こんな身近な場所で傘がつくられているなんて知らなかった。私はこの場所でどうやって傘がつくられているのかが知りたくて、直接訪ねてみることにした。

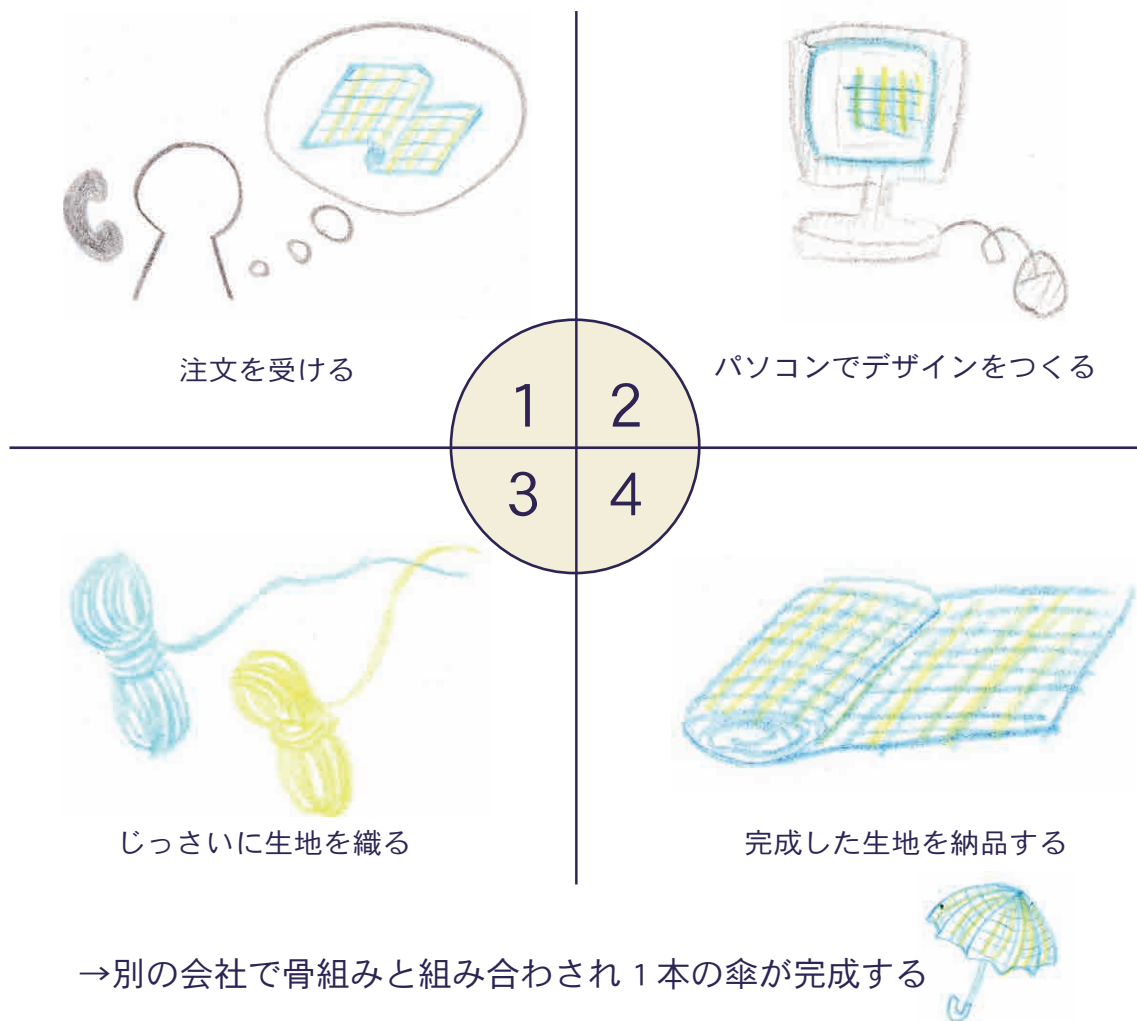
豊増華歩（国文学科2年）＝文・写真

天野商店のお仕事

出迎えてくださったのは、「天野商店」の社長、天野昭一^{あまのしょういち}（65）さん。冗談を交えながら明るく話してくださる気さくなかただ。「天野商店」は、お父さまがはじめた傘生地の製造・販売をする会社で、天野さんはそれを引き継いだそう。傘の生地をつくるにあたって「天野商店」が直接かわっているのはデザインの落とし込み、ほぐし織りでの糸の色づけ、繊維企業などとのやりとりだ。お話をうかがうため仕事部屋に入ったとき、まず機械の多さに驚く。パソコンやプリンターなど、傘を作る道具として想像していなかったものが並んでいた。天野さんの仕事は、デザインをじつさいの生地に落とし込めるように計算をすることと、ほかの会社と注文や納品の連絡をとることだという。

「天野商店」がつくるのは傘の生地の部分のみでそこからはかわっていないと聞いてまた驚いた。私は一つの傘は最初から最後まで同じ場所で作られると思っていた。しかし「天野商店」がかかわる傘はそういったつくりかたをしないらしい。天野さんは自

生地づくりの流れ



傘生地づくりかた

分のつくった生地が使われた傘がいくらかで売られていくのかもしれない。生地をつくり終え、そこから傘がどうなるかにはあまり興味がないのだという。「傘の値段はその人の（それぞれの工程での）努力で高くなる。最終的にいくらになろうと、うちはずちで見合った仕事ができればいい」と天野さんは語る。自分の仕事に集中し、その先を気にしないようすは、職人のものであった。

「天野商店」は傘生地をつくるのにコンピュータで糸の本数を計算し、線の太さや間隔を決めてデザインを再現して織る方法をとっている。この織りかたは糸の密度なども変えることができ、それによって生地の値段も変わってくるのだという。一つの生地にかかる時間は2か月ほど。天野さんは30年ほど前にパソコンやプリンターなどを購入し、傘生地づくりにこの方法を取り入れた。「この方法にはお金も結構かかって、なかなか一から始めようとなるのは難しいんですね。それに僕はもう30年も経験してるからこうい

うことがパツパツとできるんですよ」。

なぜ30年前にこの方法をはじめようと思ったのか。当時を思い出して天野さんは「興味本位」とおっしゃる。「やつぱりなんかこう、若気の至りっていうか。その時はまさか後で（ほかにはない技術として）役に立つなんて思わないよな。僕がまだ30くらいいるときに、先代にこんなやりかたどうって聞いて、最初はこんなお金のかかるものって反対されて。でもそのうち熱意に負けて買ったんだよね」。機械を購入した後もしばらくは先代から反対されることもあったそうだ。しかし亡くなる少し前になって天野さんは先代から



海外の傘を再現するためにつくられた生地。糸の本数や密度を調整することで実物に近いものになる

感謝をされたという。「この機械があつてよかったって、誰も出来ないからね」。当時を振り返る天野さんは少し誇らしげだった。

自分でやること

傘生地の種類として、「天野商店」にはもう一つの方法がある。それがほぐし織りだ。この方法の特徴は生地を織る前に糸に色をつけること。先に色をつけることで織ったときの模様が少しずれ、ぼやけたような独特の味のある柄にできあがる。お話をうかがったお宅の近くには工房があり、そこで従業員のあなたが色づけの作業をおこなっているのだという。天野さんは、「この技術を今しつかり再現できるのはそんなにいない」と語る。ほぐし織りを取り入れたのは20年ほど前。最初は東京都の印刷屋に仕事をお願いしていたが、連絡が行き届かなくて困ることがよくあった。そこでちょうど仕事がなくて困っていたまわりの印刷屋や織屋と協力してほぐし織りを都留市へ持ってきたそうだ。

あるとき、お願いしていた印刷屋がなくなつたため新しく探したものの、見つけた印刷屋も倒産してしまつた。そのため工房を



傘に使う形に裁断されたほぐし織の生地。ほぐし織の「ほぐし」というのは、生地を織る際に色づけによって固まった糸をほぐしながら織ることから呼ばれる

作って印刷屋の人々を呼んだのだという。しかし上手くいかなかった。「今まで染めたりとかしてきた人は、その人に。こういうもんだっていう考えがあるわけ。だから自分でどんどんやっちゃうわけですよ。これはだめだろ、傷だらけっていうものがあってもそれでも染めちゃう。結局（その当時雇っていた人を）やめさせて、自分でこう染めなさいよっていうのを教えて、（今も）やってもらつて。そうしたほうが自分のかたちになる」。天野さんのお話を聞くと、どんどん新しいことに挑戦するかただと分かる。「やつぱり自

分でいろんなことをやっていかないとだめなんですよね」。お話のなかでふと発せられた言葉が、本人の行動とともに説得力を持って伝わってきた。

巡っていく思い

傘の生地在完成までにはいろいろな工程がある。生地に模様をプリントする印刷屋、じつさいに生地をかたちにする織屋、できた生地を買ってくれる卸業者。これらの人々とやりとりをして傘生地を完成させるのが天野さんだ。「昔はね、たくさんつくる人がいたんですよ。今はうちしかない。こういうもの（傘生地）をつくる場所がない。だからもう天野さん入れて数軒だけだねって（言われる）」。

天野さんと傘生地を作る印刷屋も織屋も、1軒ずつではなく、5、6軒ある。それぞれが過程をもっていて、まとめるのは簡単ではないだろう。しかしその人たちがみんなが天野さんと長いあいだ一緒に傘づくりをしてきた仲間である。仕事がない時期があると印刷屋や織屋の人々が困るため、天野さん自身が仕事をとつてくれることもあるそう。生地値段を上げるため交渉したこともある。自分の周辺

で仕事をしている人の生活が少しでも楽になり、これからも一緒に仕事を続けられることを願うての行動だ。

こうして天野さんが影響をもたらした結果、まわりの人はより仕事に集中できる環境ができ、気持ちの面でも「天野さんのためなら」といいものをつくり上げてくれる。一人ひとりがつくる人でもあり、うけとる人でもある。そうやってつくったり、うけとったりすることが巡って、1本の傘が完成するのだ。

お話のなかで、あるほぐし織の傘生地を見せていただいた。都留の八朔祭のようすをデザインした生地で、以前話が出ただけで止まっていたものを天野さんが個人でつくったのだという。「都留にはお土産ついでうのがないでしょ。だからつくったんですよ」。現在は市役所のかたとじつさいに商品化するために動いているのだそうだ。

いつかこの生地を使った傘が地域の名産品として知られるときが来るかもしれない。その傘に込められているのは天野さんとそのまわりの人々の地域や人を思う気持ちだ。この

生地が傘になるとき。売り場に並ぶとき。誰かが手に取るとき。使われるとき。そのたびに、傘に込められた天野さんたちの地域への思いがまた巡ることだろう。コンビニで売っているビニール傘も便利だが、天野さんのつくった傘を使うとそんな思いに守られている気がする。どんなに激しい雨の日でも安心して外を歩けるに違いない。

八朔祭をモチーフに作られたほぐし織の生地。傘に使われるため三角形で一つのデザインが完成するようになっている





つくる人、うけとる人

私たちは今回「つくる人」と「うけとる人」の双方にお話を聞いてきました。

「つくる人」に惹かれてお店を訪れる「うけとる人」は長いあいだをかけて知ってきた、私たちには気づけない「つくる人」の魅力を教えてくれました。

「つくる人」のつくるものは日に日に進化し、変わっていくこと。ふだんは口にしないけれど、これまでたくさんの努力をしてきたこと。

「つくる人」の目的や目標がどんどん実現に近づいていること。これらはすべて、お店に通い「つくる人」を間近で見つめてきた「うけとる人」だからこそわかったことです。

取材を通して、「うけとる人」がお店に行き、「つくる人」からうけとっているものは、つくるものが進化するその過程や夢に向かう「つくる人」の輝きを見守り応援したくなる気持ちなのかもしれない、と私たちは感じました。

そのお店だからこそ味わえるものを与えてくれる「つくる人」のもとへ、「うけとる人」は今日も集まります。

FIELD-MAP



つくる人へ 会いにゆく

今号の特集で取り上げた「つくる人」のお店を紹介します。読者のみなさんも「うけとる人」の一人となって、特集の思いを共有できたらうれしいです。

大月市

上野原市

page 10-13

② まんまろカフェ

〒402-0053
都留市上谷 2-5-7
0554-56-7865



谷村町駅

ミュージアム都留

城南公園

ビジネスホテル都留

R139

至大月

page 6-9

① アルバム

〒402-0034
都留市桂町 1126-2
0554-45-2207



鹿留入口

R139

パン工房稔

新田商店

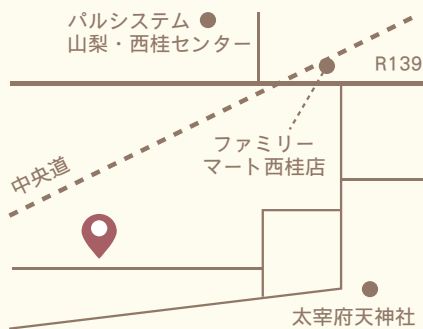
東桂中学校



page 14-17

③ 天野商店

〒 402-0033
都留市境 612
0554-45-3920



フィールド暦

気温はどんどん高くなり、すっかり夏になりました。
眩しい日差しのもと、この季節の生きものたちはどの
ように過ごしているのでしょうか。今号では7月に出
会った生きものたちを紹介します。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

イソヒヨドリ

巣立ったばかりの個体で
す。この時期は親鳥と一
緒に行動しています。

撮影地：都留市田原

撮影日：2019年7月17日



スミナガシの成虫

成虫は青緑色をした独特
の模様はねの翅をしています。
幼虫はアワブキの葉を食
べて育ちます。

撮影地：本学4号館前

撮影日：2019年7月1日



ヤブカンゾウ

都留では7月ころユリに
似た橙色の花が咲きます。
八重咲きです。ユリ科の
ワスレグサ属の植物でニ
ッコウキスゲと同じ仲間
です。

撮影地：都留市上谷

撮影日：2019年7月20日



ヒミズ

モグラの仲間では全長は1
センチほど、体重は20グ
ラムほどです。世界でも
最小クラスのモグラで日
本の固有種です。

撮影地：本学うら山

撮影日：2019年7月1日



メスグロヒョウモン

和名が示すとおりメスは
黒っぽい翅を持っていま
す。オスはまた違う黄色
の翅です。幼虫は野生の
スマレを食べて育ちます。

撮影地：本学4号館前

撮影日：2019年7月22日



クロアゲハ

幼虫はカラスザンショウ
などを食べて育ちます。
都留では5月から10月こ
ろまで姿を見ることがで
きます。

撮影地：本学4号館前

撮影日：2019年7月16日



ホタルブクロ

今年もホタルブクロがキャンパスで見られるようになりました。ただし数は減っているようです。

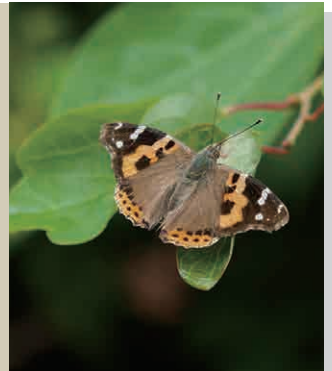
撮影地：本学キャンパス
撮影日：2019年7月24日



アカタテハ

アザミなどの花に集まります。幼虫の食料はカラムシ、ヤブマオなどです。都留では6月から11月にかけて見かけます。成虫で越冬します。

撮影地：本学キャンパス
撮影日：2019年7月22日



シカの剥ぎ痕

本学うら山でもシカが増えていて、剥ぎ痕がいたる所で見られるようになりました。写真はミズキの樹皮を剥いだ痕です。

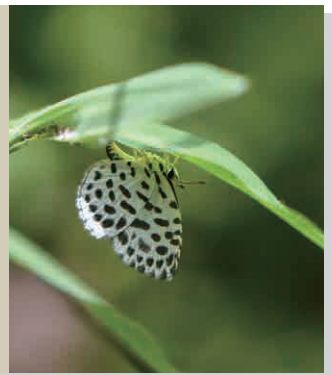
撮影地：本学うら山
撮影日：2019年7月24日



ゴイシジミ

翅にある碁石のような模様が特徴です。幼虫はアブラムシを食べます。都留では6月ごろから姿を見ることができます。

撮影地：本学4号館前
撮影日：2019年7月23日



アゲハ

幼虫はカラタチやミカン、サンショウなどの葉を食べて育ちます。都留では5月ごろから10月ごろまで見られます。

撮影地：本学4号館前
撮影日：2019年7月24日



ナナフシ

ナナフシモドキともいいます。翅はなく夜行性です。本学のうら山では今年とはくに個体数が多いようです。メスだけで繁殖します。

撮影地：本学4号館前
撮影日：2019年7月23日



アカアシクワガタ

脚の下や腹面が赤み帯びているのが特徴です。おもに標高の高い場所に生息しています。

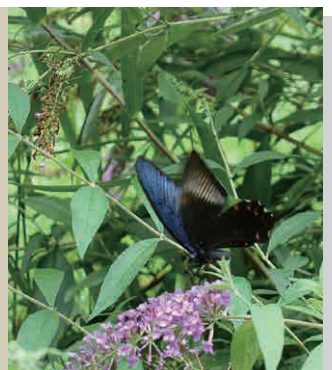
撮影地：本学4号館前
撮影日：2019年7月29日



カラスアゲハ

翅が緑と青を混ぜたような色をしています。幼虫はコクサギやカラスザンショウなどを食べて育ちます。

撮影地：本学4号館前
撮影日：2019年7月24日



つながりが生まれる

今年の5月27日で3回目の「肉フェス」が開催された。食べものと雑貨のお店が並び、当日はたくさんの笑顔があふれていた。「肉フェス」は「つながる」イベントだ。出店者さん同士、出店者さんとお客さんが「肉フェス」を通じてつながっている。じっさいに足を運んで、そして出店者のかたにお話をうかがってそう感じた。

季節外れの暑さのなか

5月なのに気温は30度を超えている。まわりをみると、みんな半袖の服を着て、さらには帽子をかぶっている人も多くいた。日傘をさしている人もいて、日向にいらるとじわじわと体が熱を帯びていく。

そんな暑さのなかでも「肉フェス」の会場からはにぎやかな声が聞こえてきた。「肉フェス」は都留市田原の、ドレッシング工房「フレックル」(本誌92号参照)の敷地内で開催される。50メートル先からもうすでに、お肉の焼ける香りが鼻にとどく。暑さのせいで衰えていた食欲が、みるみるうちに蘇ってくる。

「肉フェス」は毎年5月の最終週の日曜日に開催される。回を追うごとに出席する店舗数も、足を運んでくれる人の数も増えているのだそう。しかし当日はあまりの暑さのためか、お客さんの滞在時間がいつもより短かったという。それでもじつさに足を運んでみて、私は



人の多さに驚いた。学生、親子連れ、お年寄り
と客層はさまざまだ。近所のかただけでなく、
市外から訪れたかたもいたそう。部活終わりや
塾の合間に足を運んできた学生も多くいた。

会場の入り口ではマップが配られた。どこに行こうかな、とカラフルなマップを片手に会場を進んでいく。

回数をかさねることに！

会場のマップはイラストレーターのRicco.さんが描いたものだろう。Ricco.さんは、初回と2回目の開催で「顔絵マシーン」を出店されていた。それが縁



フライヤーにも使われたポスター。会場を進むとすぐ目に入る
(写真提供 = freckle)

となり、今回のマップができあがった。また「肉フェス」開催前にはさまざまなお店でフライヤー(※)をみかけたが、このフライヤーは、都留市出身のネイリストでもあり、エステサロン「オルオル」を経営されている安富由花さんが描いたものだ。由花さんは2回目のときにイラストを描いてきてくださり、会場に持ってこられたのだそう。それを当日貼り、3回目でもイラストはポスターとして当日会場に貼られた。さらにフライヤーにも同じ絵が使われていた。

フライヤーは開催前からさまざまな場所によくみかけた。フライヤーの裏面には、出店するお店の名前が印刷されている。手にとつて、店舗名を目で追う。なじみの店名も、はじめてみる店名も並んでいる。市内のお店だけでなく、富士吉田市などからも出店するようだ。たくさんのお店が並ぶようすを想像して、わくわくしながら当日を待ちわびた。

回数をかさねることにさまざまな人がかわって、マップ、ポスター、フライヤーとにぎやかになっていく。それだけでなく、大学の学生が会場で楽器演奏をおこなったり、都

留市のマスコットキャラクターの「つるビー」も当日足を運んだり「肉フェス」を盛り上げていた。たくさんの方の存在のもと、一つのイベントが出来上がっている。

出店者の目線から！

1回目の開催は2017年。その1回目から出店している「ロカンダ・アブラッチ」(本誌95号参照)の佐山保幸さん(44)、容子さん(45)(ご夫妻に「肉フェス」のお話をうかがった。

容子さんは出店者さん同士のつながりについて、「お互い励ましあいながら。出店は大変だけど、楽しみですね」と話す。また「肉フェス」で今まで知らなかったお店の存在を知り、目をあらためて実店舗に訪れたこともあるそう。

お客さんについては「お店に来てくれるお客さんが、みんな来てくれるの」と嬉しそうにおっしゃる。とくに声をかけているわけではないのに、お客さんが「肉フェス」まで足を運んでくれるのだという。「こんなに暑い

のに来てくれたんですかーって」と容子さんは目を細める。それだけでなく、「肉フェス」でシOPPカードをもらってじっさいに来店してくれるお客さんもいるそうだ。ふだんの客層とは異なる学生も、記念日などの特別な日にお店へ足を運んでくれるという。「肉フェス」が、新しいお客さんにお店のことを知ってもらうきっかけにもなっている。ふだんのお店の作業に加えて、イベントの仕込み作業が加わると、いそがしさは何倍にもなる。それでも「肉フェス」に毎年出店を続けるのは、こんなふうに出店者さんやお客さんと「つながる」ことも一因になっているのだろう。

「肉フェス」について、「この時期になると、あーそろそろかなあつて。これで誘いがかからなかったらとなると、相当ショック受ける（笑）。4月くらいになるとソワソワする」と保幸さんは話していた。誕生日みたいに、年に1回やってくる生活の一部のようなイベントだという。

当日、「ロカンダ・アブラッチ」^{でみせ}の出店にはたくさんのお客さんが並んでいた。いそが

しように、けれど楽しそうにしているお二人のすがたが今でも思い出せる。その光景は「ロカンダ・アブラッチ」だけのものではなく、どのお店にも共通していた。

私が「肉フェス」の会場へ着いたのはイベントが始まってすぐの午前11時5分ころだった。それでもすでにたくさんの人で会場は埋まっていた。年齢も性別も関係なく、多くの人がいよいよ笑顔で過ごしている。お客さんだけでなく出店者さんも楽しんでいて。

きつと「肉フェス」は回をかさねることに、つながりが広がっていつてどんどん進化していくだろう。これから形を変えることもあるかもしれない。だけどみんなが笑いあい、たくさんつながりを生みだしていくイベントであることはずっと変わらないはずだ。多くの人を巻き込んで「肉フェス」はきつとにぎやかになっていく。

私は1回目と2回目の開催は都合がつか



当日のようす。会場には音楽が響きわたる（写真提供＝freckle）

ず、足を運べなかった。1回目から参加して回をかさねるごとに進化していくようすを体感できなかったのは残念だ。けれど今回の「肉フェス」で知ったお店へ後日訪れてみた。そこでの時間を楽しんだ私にも「肉フェス」とおして、新たなつながりが生まれていた。

杉浦茜（国文学科4年）＝文

かけた時間が思いをつくる



環さん英弘さんご夫妻のお宅（2019年7月28日）

富士急行線谷村町駅からの帰り道に偶然見かけたお宅の、はめころしの窓が気になった。

そのデザインに惹かれて取材にうかがったところ、住まわれていたのは環さん（85）、英弘さん（87）ご夫婦だった。

7月9日、さっそくお二人に窓について聞いてみた。環さんによると、妹さんの義兄が家のデザイン画を描いてくれたのだそう。環さんは「もう無くしてしまったけれど、素敵なデザイン画だった」と話してくれた。

1階のステンドグラスなど、こだわりはいくつもある。ステンドグラス選びでは「派手すぎては駄目。地味なもの駄目」と、なかなか



修繕痕が見えるステンドグラス（2019年7月28日）

が決まらなかったようだ。窓について「はめころしだから風が通らない」とまっさきに不便なところを教えてくれた環さんだが、話すうちに、建てたときの思い出や今も大切にしているところを教えてくれた。悩みぬいて選んだステンドグラスの色が剥げたときは英弘さんに塗り直してもらったそうだ。英弘さんは直したところを笑顔で見せてくれた。

2階の窓、カーテンのあいだからはシンプルなランプが見えている。環さんは「夜に明かりがつくととても綺麗なの。いつでも見に来て」と話してくれた。「家ができたときデザインに惹かれてたっくさんの人が見に来て」と語る環さんは嬉しそうだ。

帰りぎわに環さんが、近々家のカーテンをすべて変えるのだと教えてくれた。「傷んできたからね。次は全部真っ白なのにするの」。

建てたときの思いは歲月によってよくも悪くも変化する。けれど始まりをていねいに、大切にしたいぶんだけ、時間が経っても家に対する好きと言う根本の感情は変わらないのかもしれない。

2度目にうかがうと、カーテンはすでに変わっていた。次は環さんが話してくれたように明かりのついた夜に見に行きたい。

赤松優香（国文学科4年）＝文・写真



もう一度お宅をうかがうと、窓のカーテンは全て白いものに変わっていた（2019年7月28日）

次回駅展示企画展「建物」

日時：2019年9月～（未定）

場所：富士急行線
都留文科大学前駅待合室

駅展示とは

地域交流研究センター、つるフィールド・ミュージアムが管理、運営している展示のことです。



田野倉：使われなくなったバス

田野倉の道路沿いに停めてありました。なかは物置として使われており、古道具が詰め込まれていました(2019年7月1日)

つるまち アート ギャラリー

「あれ、何だろう」。都留のまちを歩いていると、面白いものに出会うことがあります。探そうとすると見つからないけれど、ふとした瞬間に出会える個性あるものたち。このページでは、路上観察学(※)の視点から個性あるものに焦点をあて、都留の新たな表情をとらえてお届けします。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



中央：小さなお地藏様

約7.5センチの小さなお地藏様を見つけました。とても優しくなお顔をしています(2019年7月27日)



※路上観察学 身の周りのあらゆる事物を観察の対象として、路上の物件の面白さがあるがままに観察する、あるいは採集する学問。

【参考書籍】『路上観察学入門』筑摩書房 1986年



上谷：2階にある扉

2階部分についた扉。よく見ると、取っ手がついています。けれど、取っ手を掴むための階段はありませんでした(2019年7月30日)



中央：ツタがからまった自転車

民家の塀の横にツタが絡まった子ども用自転車が置いてありました。なかなか見つけるのが難しいかもしれません(2019年7月27日)



上谷：階段に見える飾り

一見すると階段のように入ります。登ってみようとしたのですが登れませんでした(2019年7月28日)

人として大切なこと



取材に笑顔で答えてくださる曙美さん(2019年7月3日)

増田^{ますだ}曙美^{あけみ}さんは都留市出身の画家・増田^{ますだ}誠^{まこと}さんの奥さんだ。旦那さんと長いフランス生活での経験をいかして、都留市で週に1回「マダム・増田のフランス語講座」を開催している。大学でフランス語の科目を受講している私は、曙美さんからの誘いを受けて講座に参加してみることにした。

私が曙美さんと初めてお会いしたのは、大学に入学して1ヶ月ほど経ったころだった。友達と「ミュージアム都留」に行ったときに、偶然にも曙美さんがそこにいらつしゃったのだ。豊富な知識を交えたお話と、見ていてこちらも思わず笑顔になるような優しい笑顔。お話好きでよく笑うところが私の祖母に似ている気がした。曙美さんといるとほっとし、ずつとお話していたい気分になる。1時間ほど経って帰ろうとしたときに、「フランス語講座をやっているから、よかつたらおいでね」と声をかけてくださり、私はすぐに行こうと決めた。

講座のようす

講座に参加してまず感じたのは、講座と
言うよりも交流会のようだということだ。フ



上：曙美さんお手製の写真たて。スーパーのトレーを再利用して作っている 下：お部屋には増田誠さんのたくさんの作品やポスターが飾られていた（2019年7月19日）



ランスの植物、ルバーブのジャムをみんなで見し、思ったことを共有する。「甘みがあっておいしいですよ」「うんうん、おいしいおいしい」。そこには笑顔があふれていた。さらにはフランス語の日常会話も飛び交い、楽しみながら異文化に触れることができる。「Je suis Japonaise; (私は日本人です)」「Où est votre maison? (あなたはどこに住んでいますか)」「まるでその一室だけが、都留市ではなくフランスに存在するようだ。そこにいるみんなで学び、みんなで楽しむ。ずっといたくなるような笑顔の絶えない空間だ。

曙美さんの人柄

講座から数日経って、お話をうかがいに今度は曙美さんのご自宅にお邪魔した。山が近い静かな場所に建つお家で、部屋じゅうに誠さんの作品や愛くるしい家具、曙美さんご自身が作られた小物であふれている。優雅で落ち着くその空間は、曙美さんの人柄を表しているようだった。

「人とかかわるときに、気をつけていることはありますか」。曙美さんのまわりがつねに笑顔であふれていることを不思議に感じた私は聞いてみた。すると、「そんなものあるわけではないじゃない」と笑っておっしゃる。ただ実家がお寺である曙美さんは、お寺に訪れてくる人たちにいつも父がご飯をあげていたところを見ていたという。「人とかかわることが好きとか嫌いとかじゃなくて、いつも父のそういうところを見ていたから、自然とそうやっていったのかもね」。小さい頃から身についていった曙美さんのありのままの笑顔と心で自然と人が集まってくるのだろう。フランスにいたときにも、よく現地の日本人を自宅に集めてご飯をふるまい、みんな

でテーブルを囲んでいたそう。「楽しかったわよ」と目を細めながらお話ししてくださった。私もいつか曙美さんのような人になれるよう、まずはどんなときも笑顔でいられるように意識したい。

曙美さんに取材を重ねていくうち、つねに笑顔でいることや人とかかわりを大切にすることを自然と教わった。人として基本的なことではあるが、忘れてしまいがちだ。私もいつか曙美さんのような人になれるよう、心がけていきたい。

帰りぎわ、私が来週フランス語の試験があることを伝えると、大事な文法などを教えてくれた。「テスト頑張つてね、動詞の活用に特に気をつけるのよ」。いつもの笑顔でこづかいをかけてくださった曙美さんのおかげで、頑張らなくちゃと気持ち引き締まった。曙美さんのやわらかい笑顔を思い出せば、どんな問題も解けそうな気がする。

深沢有佳（比較文化学科1年）＝文・写真



縁を繋ぐひと

—前編—

4月のはじめ、都留市^{なかつもり}中津森にお住まいの^{こばやししげお}小林重雄さん(69)に、都留市には「お茶壺道中行列」という行事があることを教えていただいた。気になった私は後日、「お茶壺道中実行委員会」の委員長である^{いおまきみお}岩間公勇さん(63)にお話をうかがった。お話に引き込まれていくうちに、都留市の歴史と岩間さんの熱い思いに触れることができた。

小林史佳(地域社会学科2年)=文・写真

お茶壺道中行列の開会式の様子を見守る岩間さん(写真提供=お茶壺道中実行委員会)

お茶壺道中と童謡

はじめて岩間さんにお会いしたのは7月2日だ。落ち着く声のトーンに親しみやすい笑顔の岩間さん。さっそくお茶壺道中行列について聞こうとしたら、『「ずいずいずつころばし ごまみそずい 茶壺に追われて戸ッピンシャン 抜けたらドンドコショ」という童謡は聞いたことがありますか』とおっしゃる。突然のことに驚いたが、小学生のころ友達と歌いながら手遊びをしていたの思い出した。岩間さんによると、この歌が、江戸時代におこなわれていたお茶壺道中にか

かわるものだという。

お茶壺道中とは正式には「御茶壺道行」というもので、将軍が飲む宇治茶を茶壺に入れて江戸まで運ぶ行事のことをいう。「御茶壺道行」は、名門貴族と同じくらいに権威の高いものだと言われていた。御茶壺が通るときには、大名でさえも籠を降りなければならず街道沿いの村々には街道の掃除が命じられたというほど格式あるものだ。「ずいずいずつころばし」の歌の冒頭の部分は、茶壺が来たから戸をピンシャンと閉めて通り抜けるまで待っていた、ということを示している。目立つことを恐れ、戸を閉めていたことから、当時の住民からは恐れられていたようすがわかる。小さいころに歌っていた歌が大学生になり、都留市で結びついたことに驚いた。

岩間さんとお茶壺

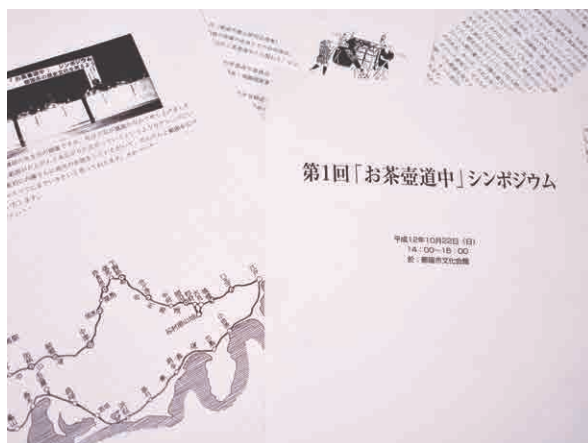
岩間さんがお茶壺道中に興味を持ち始めたのは、23年前に都留市の商工会青年部に所属していたときのことだという。県内外の商業にかかわるかたが集まる会に出席したときに、勝山城のお茶壺の話が出て場がとても盛り上がったそうだ。その当時は全国各地で

まちおこしが盛んに叫ばれていた。ほかの地域ではまちおこしの成功例を真似するひとが多かったのだという。その地域ならではの特徴あるものが都留市にはないのかと考え、たどりついたのがお茶壺だったという。「景色や葉っぱみたいなもの（どこにでもあるようなもの）じゃなくて、誰が見ても唯一絶対このものというものがよかった」と嬉しそうに教えてくれる。

そこで岩間さんは仲間とともに「お茶壺道中実行委員会」の前身となる「お茶壺道中研



お茶壺道中行列に使用された壺（写真提供＝お茶壺道中実行委員会）



第1回お茶壺道中行列をおこなう前に開かれた、シンポジウムの資料。35ページにもおよぶ（2019年7月17日）

研究会」を結成し、お茶壺に関する勉強会を開くことにした。その研究会の活動でお茶壺道中をしようという発想を得たそうだ。「はじめは道中行列そのものだけでなく、市民の皆さんにお茶壺の価値を伝えたかった。まず目からはいるものとして行列を試してみた。早く皆さんが、お茶壺道中だけでなく、お茶壺に目がいつてほしい」とおっしゃっていた。

地域にかける思い

お話を聞いていて、どうしてそこまで自分の住む地域に熱い思いを持てるのが気になった。お聞きすると、小さいころ近所のかたに言われた一言が印象に残っているというのだ。「両親が国中地域（の出身）で（注1）近所のおじさんにそのことを言われた記憶が残ってる。なんでそう言われなければいけないのか。俺はここで生まれたけど文句あるかって。町のことを知りたくなった。故郷だ。俺はここの人間だつて」。

さらに岩間さんは全国各地を自分の目で見ることが好きだった。「ちよつと変わつてたんだよ。小学生のころから自転車で旅行いたり。一人でユースホステル（注2）いつ

たり泊まつたり。あそこはこういうまちだった、ああいうまちだったって、比較ができたんじゃないかな。今でも覚えてるけど、伊豆半島のバス停で寝泊まりしたとか。文大生（本学学生）の影響もあった。（実家の敷地内にアパートが建っており）うちのアパートで寝泊まりしてお兄ちゃんたちもそんなことが好きだったんじゃないかな。お兄ちゃんたちに河口湖とか山中湖に連れてってもらったりして」。お茶壺道中にも通じる、地域に対する愛着と挑戦を続ける勇敢さは、きつとここから来たのだろう。

「小さな繋がりかもしれないけれど、それをひろつて大きくしていきたい。（現状細い糸のような小さな繋がり）を（ロープ）にしていなくてはいらないね」とおっしゃる。

現在、お茶壺道中の実行委員会のメンバーは約20名ほど。年齢性別もバラバラだ。組織発足時のメンバーもいれば、本学の学生もいるそうだ。「都留子どもまつり（のかた）や吹奏楽の部長さんがやってくれてるね。前日や当日に声をかけてもやってくれる。みんなで作っているっていう思いがあるね。（在学時から参加していた）文大の卒

業生のかたもやってくれている」。なぜ、こんなにも違う年代層が集まっているのにうまく運営ができるのだろうかという気になりお聞きすると、「水平的にやっているから。年功序列じゃないから。利益を求める組織じゃなくて、そのときの皆さんの思いでできている。最低限のことはやってみんなで楽しみましようよ。実行委員会のかたがまず楽しむ」とおっしゃる。その考えがあるからこそ、ますます縁が広がっていくのだろう。20周年に向け、委員会の活動は今がもっとも忙しい時期だ。来号では、お茶壺道中行列をじつさいに取材してわかったことをお伝えしたい。

今年度のお茶壺道中行列の日程
とき 2019年10月27日
午前10時ころ出発（予定）
場所 金比羅神社前くまちづくり交流センター
お茶壺道中行列20周年事業
とき 2019年12月8日
午前1時ころ（予定）
場所 まちづくり交流センター4階大ホール

注1 国中地域 甲府盆地を中心とする山梨県中西部

注2 ユースホステル 青少年の旅に安全かつ安価で宿泊場所を提供しようと始まった活動と、それにより生まれた施設のこと。ここでは施設のことを指す

今号の撮っておき

取材中の何気ないひとこまや撮影途中に出会った不思議なものなど、私が見つけたとっておきの1枚を紹介します。
江利そらむ(社会学科4年)=文・写真

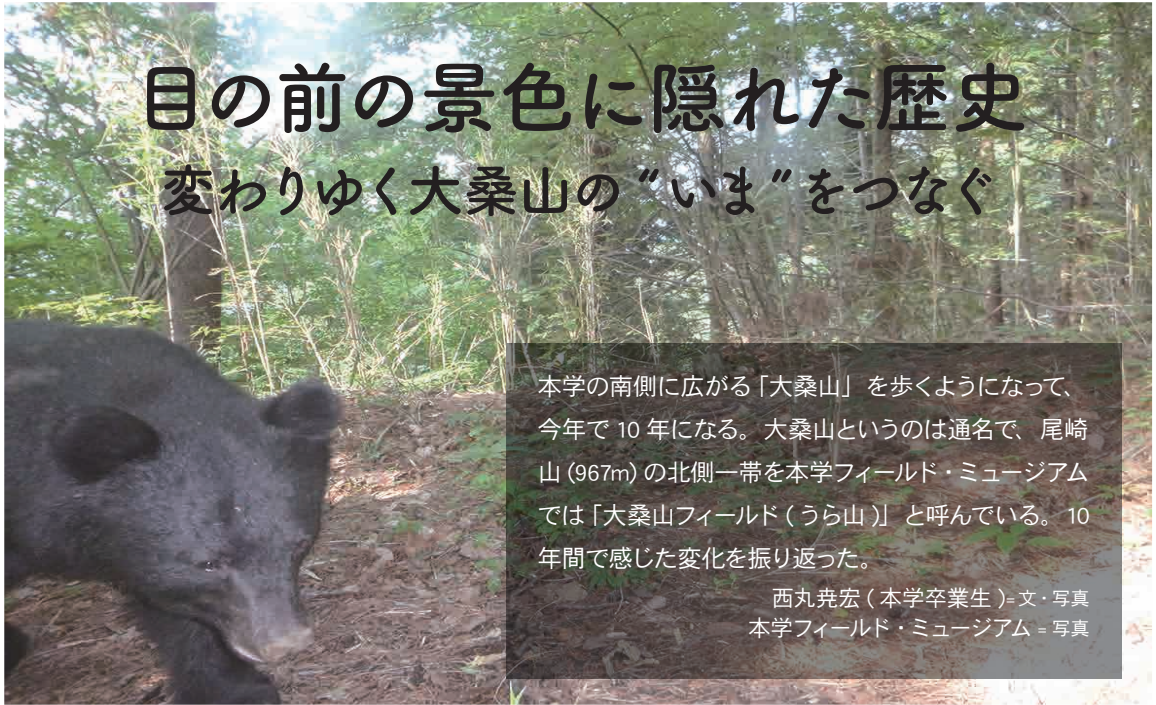


(2019年7月19日@都留市つる)

101号に引き続き、今号の裏表紙でも詩人せきぐちさちえさんにお世話になりました。せきぐちさんは詩の舞台となった場所へ案内してくれるだけでなく、まわりの景色の変化やその場所で起きたことなども教えてくださいました。私はせきぐちさんの後ろでうなずきながら、贅沢な時間を味わっています。引き続き裏表紙もお楽しみください。

目の前の景色に隠れた歴史

変わりゆく大桑山の“いま”をつなぐ



本学の南側に広がる「大桑山」を歩くようになって、今年で10年になる。大桑山というのは通名で、尾崎山(967m)の北側一帯を本学フィールド・ミュージアムでは「大桑山フィールド(うら山)」と呼んでいる。10年間で感じた変化を振り返った。

西丸 亮宏(本学卒業生)=文・写真
本学フィールド・ミュージアム=写真

▲①ツキノワグマ(2015年6月24日)

大桑山に通うきっかけになったのは、2009年10月からおこなっている赤外線センサーカメラでの動物調査だ。山中に赤外線自動撮影できるカメラを設置して、どんな動物が暮らしているのかを長い目で追いかけている。

調査では、これまでに18種のほ乳類が撮影されている。ツキノワグマやニホンカモシカなど深い山に棲むとされるものから、ニホンジカやタヌキ、ノウサギといった里山の動物まで。カメラでは撮影の難しいモグラやネズミ、ムササビなどを合わせると、少なくとも24種のほ乳類が大桑山で暮らしている。

ニホンジカの撮影は4倍弱に

10年は長いようで、自然史からみると一瞬にも満たないような短い時間だ。それでも「変化」を感じることはできる。そのひとつが、ニホンジカだ。

2012年にセンサーカメラの調査を取りまとめたとき、1975(昭和50)年ころまで山で農作業をしていた十日市場在住の渡邊宗男さん(当時81)に聞き取りをしている。

そのとき渡邊さんは、「ニホンジカは10年ほど前(2002年ころ)までは尾崎山でみることはなかった」と話していた。

今では山を歩いて一番見かける機会が多い。センサーカメラに撮影される頻度は4倍弱に増えた。ニホンジカが好んで食べるとされるアオキ(常緑の低木)も、詳しい調査はしていないが、10年前と比べて減っていると感じる。

山を歩き始めたころは、ニホンジカよりもリスに出会うことのほうが多かった。大桑山での出来事をメモしている野帳には、リスとの出会いの記録が多い。

最初の記録は、2009年10月26日、曇りで薄暗い森の中だった。メモを抜粋する。〈青いクルミをくわえて運ぶリス。地面に降り、その後、倒木の上を走っていった〉。



▲②ニホンジカ(2014年10月2日)



▲③カモシカ(2013年5月22日)



④ニホンリス (2011 年 4 月 16 日)

少し走っては止まり、また少し走っては止まり……といったようなリスの特徴的な走りがたも併せて描かれていた。今から考えると、そういう気づきがあったからこそ、リスの写真も慌てず撮ることができるようになったのかもしれない。

リスと人をつなぐアカマツ

最初の出会いはスギ・ヒノキの植林地だったが、リスをもっともよく見かけたのは、アカマツ林だったと思う。アカマツの林には、リスの松ぼっくり(アカマツの球果)の食べ痕がよく落ちていた。この食べ痕は一つひとつ形が異なり、一度どれくらいの差があるのか集めたことがある(写真⑤参照)。30分と時間を決めて、アカマツのまわりで拾い集めた結果は「116個」。大きさの違いはもちろん、食べかけのものもあった。見比べてみると、松ぼっくりの根元のほうから食べ進めている。よくよく考えると、松かさを一枚ずつ剥がしてなかの種子を食べるわけなので当然なのかもしれないが、気づいたときはうれしかった。

このアカマツ、大桑山全体で立ち枯れが進んでいる。台風などで強い風が吹けば、そのたびに木が倒れることもしばしばだ。

大桑山の尾根沿いに広がるアカマツ林は、リスと出会う場であるだけでなく、人と自然との歴史を示す場所でもある。

へ大桑山のアカマツ林のある場所は、1960(昭和35)年ころまでは柴刈り場だった。当時はナラ類やクヌギなどの小さな雑木を刈り、田んぼに入れて肥料にしていた。アカマツは肥料には向かないため、刈る人はおらず、その結果として今も残っている(本誌67号より要約)。

前出の渡邊さんから2011年に聞いた話だ。人の手がアカマツを残した結果、そこを今リスが利用している。「うら山」と呼ばれるだけあり、大桑山は人との距離が近い。当たり前のように見えている自然のなかにも、じつは人の歴史が潜んでいる。

大桑山に通い始めた当時は下宿していたこともあり、週2回ほどは足を運んでいた。大

学を卒業し、それが月1回になり、今では2カ月に1回ほどになりつつある。見える解像度は粗くなり、日々の変化を捉えるという視点から、経年の変化をみるという大きな視点に変わった。

動物に出会ったり痕跡を見つたりすれば、そこに彼らが「いる」ことが分かる。長く通いながら記録をするのは、その点の記録をつなぐためだ。日記のように、少しずつでも記録し続ければ「変化」を読み解くことができる。

どこまで続くか分からないが、たとえば100年後に「この記録を誰かが役立てくれれば」。そう思いながら、今日も大桑山に通っている。



▲⑤ニホンリスの食べ痕 (2014 年 4 月 16 日)

センサーカメラが 写した動物たち



本学フィールド・ミュージアムでは、本学のキャンパスの森にセンサーカメラ（赤外線を感知すると自動的にシャッターが切れるカメラ）を設置して動物の調査をしています。今号では7月に撮影された動物を紹介します。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



ハクビシン (2019年7月13日0:38) 撮影地: ②

木登りがうまく、樹上で生活します。顔の真ん中に白い線が入っていて尻尾が長いのが特徴です。雑食性ですが、とくに果実を好みます。



ヤマドリ (2019年7月12日06:19) 撮影地: ②

メスは短い尾に茶褐色の体をしています。分布する地域によっては絶滅が心配されているようです。「コココ、チェイ」といった鳴きかたをします。



アナグマ (2019 年 7 月 23 日 3 : 59) 撮影地 : ②

鋭い爪で地面を掘り、おもにミミズを食べます。小動物や果実も食べます。キャンパス周辺で近年よく見かけるようになりました。



タヌキ (2019 年 7 月 21 日 21 : 20) 撮影地 : ②

夜行性で山地や森林ばかりでなく、住宅地にも現れます。木登りもできます。決まった場所にフンをする習性があります。この習性は縄張りの目印のためともいわれています。



ノネコ (2019 年 7 月 29 日 0 : 00) 撮影地 : ①

雨の影響でレンズに水滴がついています。体の小さなノネコのようにすをとらえました。ノネコによる生態系への影響も心配です。



イノシシ (2019 年 7 月 28 日 17 : 46) 撮影地 : ②

イノシシのメスは子供とともに移動する習性があるので、近くに母親がいるかもしれません。ミミズや昆虫、そして草木や果実を食べる雑食性です。

おりみず cafe 織水

—悩んだとき、活力が欲しいとき、思わず行きたくなる店—



この建物はもともと水車小屋だった(2019年6月28日)

かせい
禾生駅を下車して国道139号線を大月市方面へ徒歩10分。cafe 織水は落合水路橋を横目に建っている。お店を営むのは、若林昌彦さん(51)、由実子さん(50)ご夫婦。メニューは、カレー、日替わりケーキ、酵素ジュース、スムージーとなっている。古い建物を再利用したカフェを見たことなかった私は興味を持ち、お話を聞きに行くことにした。

この建物を使おうと思ったのは、前々から落合水路橋を見られる立地に惹かれており、地元もこの建物の近くだったからだという。

どうして古い建物を再利用してカフェを営もうと考えたのか、昌彦さんに質問すると、「自分でゼロから何が築け、形にしていけるか試してみたかった」と思いもよらぬ回答が返ってきた。私はこの古い建物でカフェを営むことに意味があると思っていた。しかし若林さんご夫婦にとってこのカフェは、新たな人生のスタート地点であって、その材料の一つに過ぎなかった。

私は小さいことであつても、周りの目を気にして行動に移せないことが多い。だから、前職をやめて新しいことに挑戦する道を選んだ決断に衝撃を受けた。自分の人生を自分の生きたいように生きる姿は、かつこいい。

そんな昌彦さんとカフェを営む奥さんは、どの料理も素材に気を使い、植物性の食材しか使っていない。なかでも私が衝撃を受けたのは、ケーキに卵や乳製品を使っていないことだ。奥さんはどうやって自分の料理に対する思いが伝わるのか、言葉を選びながら私に一生懸命に語ってくださった。その言動か



明治時代に建設された落合水路橋が窓越しに見られた(2019年7月20日)

らも料理への熱い思いが伝わってきた。そんな奥さんの料理を食べるのがもつたいたいと思いついた。私はぺろりと平らげてしまった。

私がcafe 織水を訪れたのは、古い建物を再利用したカフェを初めて見たからだ。しかし何度か足を運ぶと、建物以上に若林さんご夫婦の人間性が惹かれていった。昌彦さんの、自分の芯をもって生きる姿、奥さんの自分が作るものに真剣に向き合う姿から、私自身自分と向き合って精一杯生きたいと考えるようになった。お二人は私にとって、生きる上での師匠のような存在だ。cafe 織水という店に出会えたことは、私が生きていくうえで大きな財産となった。

馬庭優歩(地域社会学科1年) 文・写真

ただいまを 言いたくなる店



お店自慢のホワイトグラタン



寿司屋だった頃から使われているカウンター

富士急行線^{かせい}禾生駅から「道の駅つる」方面に歩いて約15分。静かな街のなかに、えんじ色の暖簾^{のれん}が目印の店が建っている。喫茶店「手づくりの店ままあばば」だ。店内にある、厚さ7センチはありそうな木のカウンターにはショーケースがついており、奥には座敷がある。そこはカフェというより定食屋のような雰囲気だ。初めて見たはずなのに、どこか懐かしいその雰囲気に私は惹かれた。

店主の小俣貞子^{おまたさだこ}さん（67）によると、このお店は元寿司屋で、以前は寿司職人のご主人のお店だった。小俣さんは10年以上前から、都留市^{よつかいちば}四日市場でカフェを営んでいたが、使われなくなった店舗を活用しようと、3年前にこの場所に移転したとのことだった。「ままあばば」という店名は、移転する前に、近所の学校に通う中高生がよくお店を訪れていたため、彼らに家族のようなぬくもりを感じてほしいという願いがこもっているそうだ。

手づくりの店

「ままあばば」のこだわりは、お店の名前にもある「手づくり」だ。メニューにはグラタンやジャージャー麺といったごはんものか

ら、ケーキやプリンなどのデザートまでさまざまな食べものが並ぶ。それらはすべて、小俣さんの手づくりだ。「気負わずに食べられる家庭料理を提供したい」と小俣さん。「今日は暑いね」。「裏でこんな実が取れるのよ」。そんな話をしていると、まるで友達の家でお母さんにごはんをご馳走になっているような気分になった。ついお店に来ていることを忘れるほどくつろいでしまう。

1番人気のメニューはホワイトグラタンだ。細めのマカロニとチーズ、小俣さんの愛情がたっぷり詰まったグラタンは、優しい味わいで母の手料理を思い出させた。

「ままあばば」に惹きつけられる理由は、ご主人が長年使っていたお店、娘さんの手書きのメニュー、小俣さんの手料理。そしてお店のすぐ隣にある自宅から聞こえてくる、「ただいま」、「一緒に遊ぼう」という、お孫さんたちの元気な声にある。家族のぬくもりを身近に感じさせてくれるこの環境が、「ままあばば」を他のどこにもない、暖かく魅力ある空間にしているのだろう。またここに「ただいま」という気持ちで戻ってきたい。

渡邊唯（地域社会学科1年）Ⅱ文・写真

楽しみをつくる

星空と、都留の人がつくる小夜景

幼いころはよく星座を探していたが、大きくなつてからは、たまに夜空を見上げる程度になつていた私。都留に来て「星がきれい」という話をよく聞くので、どんなものかと気になつていた。

そこで6月26日23時ごろ、友人と都^{みづ}留の杜^{もり}うぐいすホールへ星を見に行くことにした。最初は、夜のうぐいすホールに星を見に行くのが初めてでどきどきしていた。ところが一緒に見に行く友人は「夜はシカが出る」「この前そこで奇妙なものを見た」と言う。違うのは暗いというだけで、いつも通る道なのに、いつ何が起こるか分からなくて怖かった。

うぐいすホールに着いて、空を見上げる。何も見えなかつた暗闇にだんだん目が慣れていくのが分かつた。木や建物が視界をさえぎらず邪魔するものがない広い夜空。そこに散らばるたくさんの星。星をしつかり見るのが久しぶりで、幼いころ星座を探したときのわくわくした気持ちを思い出して懐かしくなつた。いつのまにか怖い気持ちはどこかへ消えてしまった。よく見ると青白い星、黄色みがかつた星、白い星、光が弱くぼんやりした星、光が強くひととき目をひく星といろいろ



ある。色や輝きの違いがおもしろく、思わず時間を忘れて無言で見入ってしまった。

ふと目を本学のほうへ向けると、民家の明かり、学生が暮らすアパートの明かり、街灯、これらの集まりが見えた。都会と比べると小規模ではあるが、それが夜景のように思えた。夜景というと都会の高層ビル群の夜景や、工場夜景というイメージを持っていた。都留の小夜景は子ども、おとな、学生などが暮らすことで生まれるあたたかい明かりでできている。この小夜景は学生と地域の人がともに生きることによってつくり出されているのだらう。都留で一人暮らしをはじめて約3

か月と少し。少しさみしくなっていた私は小夜景を見て人の存在を実感し、安心することができた。そして自分もこのなかに存在しているのだと思うとめぐり合わせに感動した。

一般的に、星を見るには明かりが少ない場所が適していると言われている。都留は明るい建物がないので空が明るくなりすぎず、星を見渡すことができる。また、自分が生まれ育った地元には、街を一望できるような高い場所がこんなに近くなかつた。だから私は、星を見るのに恵まれた環境と、街明かりを見渡せる高い場所がそろっていることがとても貴重だと思った。

星と小夜景を見にいつて、身近な環境に楽しみを見つけたら、楽しみを自分でつくり出したりすることの大切さを学んだ。楽しみがあればより充実した生活を送れるはずだ。だから、これは自分の人生をより充実したものにするために必要なことだと感じている。友人に「運がいいと天の川が見える」と聞いたので、この先も星を見に行き続けようと決めた。

鎌田千聖（地域社会学科1年）Ⅱ文・絵

つるの子公園

ここは私の第二の故郷

辻口いづみ（地域社会学科1年）Ⅱ文・写真

ある日、都留市に住む友だちと学校から二人で帰った。怖がちな私に友だちが、「夜の公園を通って帰らない？」と言う。上谷の住宅地裏にひっそりとたたずむ公園。ふだんなら通ろうと思わないが、私はこれまでに夜の公園へ行ったことがなかったため、興味深く感じて行くことに決めた。

時刻はすでに夜7時を過ぎており、肌寒く静かな夜だった。公園には誰もおらず、私たち二人だけ。たわいもない話をしながらブランコをこぐ。不意に友だちが音楽を流し



友だちとこいだブランコ



つるの子公園の遊具。あまり使われていない。色が落ちていたり、錆びたりしている

た。歌いかたはけだるく、メロディーが流れてシャレている曲だ。登下校をするときや家にいるときに音楽を聴いていても「良い曲だな」としか思わないが、その瞬間いつもと違ったワクワク感を抱いた。夜の公園だと音楽の醸し出す雰囲気が増すからか、より一層音楽が耳に残る。こんなに楽しい夜はないと思えた。これが、この公園との出会いである。

それ以来、あのワクワクした夜を忘れられず、たびたびこの公園を通るようになった。通い始めてから、公園の名前が「つるの子公園」ということを知った。静かなようすや、森沿いで草が伸びきっていて自然に囲まれて

いるようすが、私の地元の雰囲気と重なる。そのため、穏やかで落ち着いた気持ちになれる。ここに暮らしてつるの子公園に通うにつれて、地元にいるときのようじんのびとできるようになっていた。じんのびとは、奥能登の方言で、のんびりした・気が休まるという意味だ。

一人暮らしを始めて約4ヶ月が経った。私には自分一人でも難なく生活していける自信があった。しかし、家に帰る道すがらついつい公園を通ってしまう私は、きつと地元を恋しく思っているのだろう。そして、公園のアットホームな雰囲気が自分を支えてくれたのだと気づいた。これからも地元に想いをはせながら、つるの子公園に足繁く通う気がしてならない。



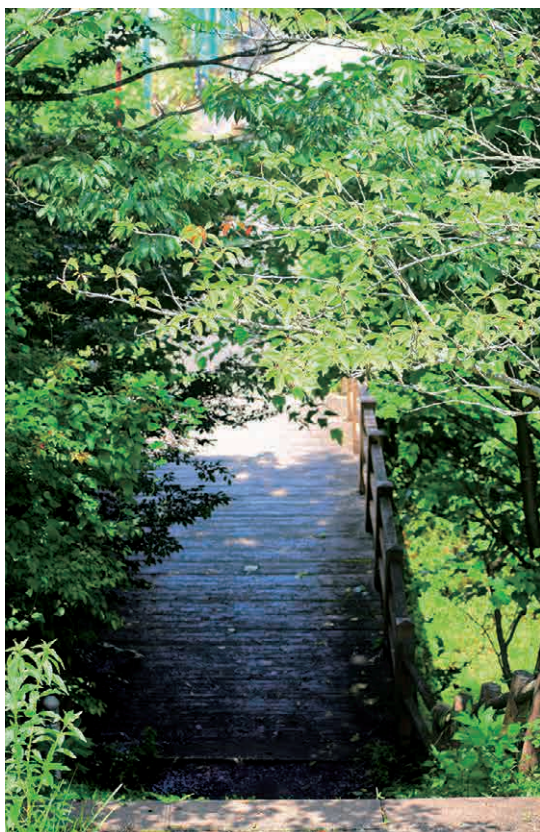
公園には色あざやかなモザイクアートもある。これは、市内の子どもたちが手作りした

都留の風景写真集

盛夏の候

水色の空に大きくて真っ白な入道雲が浮かんでいます。日差しが強まり、影は濃さを増してきました。夏の暑さにはうんざりするばかりですが、強い日差しのなかで、目に見えるものたちがはっきりと色濃くなるのには毎年心が踊ります。今号では夏の日差しを感じるような景色を写真におさめました。

杉浦茜（国文学科4年）＝文・写真



本学外周（2019年7月17日）



本学テニスコート（2019年6月26日）



上：本学外周（2019年7月17日）
 中：本学4号館前（2019年7月24日）
 下：本学外周（2019年7月15日）

FIELD NOTE

no. 102 Aug.

発行人

北垣憲仁 (22-23,38-39)

統括編集者

西教生

編集長

平岡摩梨菜

宇佐美温加 (2-3,10-13)

副編集長

風間悠花 (4-5,6-9,38-39)

小林史佳 (28-29,32-34)

豊増華歩 (14-17,18-19,22-23)

編集

伊藤瑠依 (20-21)

江利そらむ (1,35,48)

杉浦茜 (24-26,44-45)

高橋光 (46-47)

鎌田千聖 (42)

辻口いづみ (43)

深沢有佳 (22-23,30-31)

馬庭優歩 (40,46)

山城美結 (36-37)

山本義城 (38-39,46)

渡邊唯 (41,46)

編集補助

小泉篤広

佐藤琢磨

小俣溪和

寄稿

西丸堯宏 (36-37)

赤松優香 (27)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD・NOTE no. 102

発行日：2019年8月29日

発行部数：700部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

『フィールド・ノート』編集部

E-mail : field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

感想や「この人を取
材してみたい」
などのご意見をお気
軽にお寄せください！

お詫びと訂正

101号13頁に、宝鏡寺のヤマブキソウを「天然記念物」と記載していますが、正しくは「自然記念物」です。関係者および読者の皆さまには訂正してお詫び申し上げます。

©2019『フィールド・ノート』編集部 乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。編集部までお知らせください。

no.102 Aug. 2019

46



編集後記

地元の夏、都留の夏

まだ寒いから上着も持っていこう。そう思って河口湖の自宅を出て都留市へ。でも電車を降りると暑くて暑くて、やっぱり上着いらなかったな、という日が入学してから何日もありました。電車で40分の距離なのに、気温が平均で2度は違うこの二つの町。調べてみると、富士急行線河口湖駅と都留文科大学前駅の標高差は354メートルもありました。そういえば昔、理科の授業で100メートルで0.6度温度が変わるって習ったなあ。避暑地育ちの私には、都留の暑い夏を乗り切るのは大変そうです。(渡邊唯)

きひが経っても忘れない夏の思い出。小さいころ、私には家族で地元の花火を堤防から見るという夏の恒例行事がありました。昔は、花火の音が怖くて耳をおさえて見ていて、よく親に「怖がりだね」と言われたものです。そんな私も大人になって都留で一人暮らしをしています。しかし月日が経っても家族と堤防で見るその花火の輝きを私は忘れていません。私は都留で過ごす4年間の中でも、記憶に焼きつく夏の思い出を作りたいと思っています。(馬庭優歩)

りんご飴。夏祭りといえぱりんご飴が思いつきます。私の地元は炭鉱が有名で、毎年この時期になると夏祭りに向けて近所から太鼓のドンドンという音に合わせて炭坑節の「月が〜でたでた〜月が〜でたあ〜ヨイヨイ」という音が聞こえてきます。幼いころに家族で夏祭りに行き、りんご飴を片手に炭坑節を見て音に合わせて踊っていたのを思い出します。都留市に来てもうすぐで4か月が経とうとしています。都留市に来たからには、都留市特有の伝統に触れていけたらいいと思う今日このごろです。(山本義城)



次回予告

わたしが見つけた 芸術家

2019年12月発行予定

ふるのうた

都留市を舞台にした詩をきっかけに街を歩いてきました。
詩の余韻を抱えながら街を歩くと、この景色にまた1歩近づいたような気がします。



せきぐちさんとともに詩の舞台となった場所を訪れました。すでに田植えがされた後でしたが、この場所に立ったとき「水田の空」という詩が自然と浮かんできました(2019年7月19日)

みずた 水田の空

高いところにあると
見上げてばかりいたが なんと
満々と水を引いた田の中にあった

四囲を畔で区切られてはいるけれど
澄んだ空の上を
雲がゆっくりおよいでいく
緑濃い山々 高速道路
二両編成のローカル電車
カラフルな家々の屋根

住み慣れた町も
日々の営みも
街中の田に
水彩画で描かれている

初めて見るように新鮮なのは
胸がときめくのは
逆さになっているからだ

さざ波がたって
五月の風が水田を渡っていく

ぼ一んとわたしも
でんぐり返ってみようか

水田の空の上に
軽やかに若々しく
他人のわたしが立っている

詩=せきぐちさちえ
1942年山梨県都留市生まれ。自称「谷村っ子」。都留詩友会の会員として、これまでに3冊の詩集を出版する。
写真=江利そらむ(社会学科4年)

